

特活研究第93号



第52回 愛媛県特別活動夏季研究会に寄せて

愛媛県教育研究協議会特別活動委員会
委員長 荻山 俊樹

1967年の第1回大会(八幡浜大会)以来、愛媛県特別活動夏季研究会は半世紀に渡り続いていきます。会場を、南予、中予、東予と輪番で持ち回り、県内各地の特別活動に関心が高い仲間が集い、実践をもちより研究を深めてきました。しかし、昨年度は新型コロナの影響で中止せざるを得なくなりました。社会全体が感染拡大の防止対策を強いられ、2月末には政府による緊急事態宣言と全国の学校の臨時休業の要請という未曾有の出来事が起こりました。先の見えない不安と戸惑いの中、「できることをできる形でやってみる。できないことはどうしたらできるようになるのか知恵を出し工夫する」と気持ちを切り替えることで何とか前を向いて進むことができました。そうして、5月末ようやく分散登校、学校完全再開となりました。以下は、学校再開当日に生徒や先生から聞いた言葉です。「みんなが学べる」「全員そろっての教育活動」改めて学校というものの存在意義に気付かされました。

私は、今日やっと学校生活が戻ってきてうれしさが隠せない。約3か月友達と会えなかった分、たくさん話をしたり、遊んだりできるのが楽しみだ。大変長い間、友達や先生方と会えない日々が続いていましたが、今、こうしてみんなで学校に登校できるようになり、胸がいっぱいです。みんなで、頑張り、みんなで学べるのが学校だと思います。(生徒)

3か月教壇に立たないという希有な経験。1年生はただでさえ慣れない中学校生活の上に、「新しい生活様式」で、不安や緊張でいっぱいの様子。全員揃っての教育活動ができることに感謝し、教師として精一杯対応せねばという気持ちである。(教員)

「安全・安心」を最優先とし、教育活動に制限が課せられる中、3密を避け、マスクの着用・手洗いの奨励。当たり前だった対面・参集での活動はできない学校の常識の変更を迫られる状況になりました。集団活動を通して学ぶ特別活動の本質を考えると、想像できない現実を突きつけられる思いでした。

本年度の夏季研究会は、オンライン会議システムで開催することといたしました。東京五輪開催のど真ん中になりましたが、「絆を深め、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造」を研究主題とし、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 安部 恭子 先生に参会いただき開催につなげることができました。

「放っておいて子どもが育った」これは教育ではないと言われます。特別活動は「なすことによって学ぶ」を方法原理とし「場を作る」、「仕掛ける」、集団活動を通して、学校づくり、学級づくり、自らの成長につなげていくものです。さらには、「Yes, I can. Yes, we can. ~自分もよくてみんなもいい~」、「感動~感じて動く~」、子どもが育つ、おもしろい、やりがいを感じる、忘れられない特別な教育活動です。コロナ禍の中、このような状況だからこそ、改めて、特別活動の果たす役割や可能性について考え深めて参りましょう。

最後になりましたが、各分科会では、アドバイザーとして愛媛大学から白松 賢 先生、藤原 一弘 先生、梅田 崇広 先生、遠藤 敏朗 先生に御助言をいただく機会にも恵まれ、ありがたく存じます。また、各分科会での発表・司会・記録、研究会の準備・運営に携わっていただいているすべての先生方にも深く感謝申し上げます、挨拶といたします。

特別活動

I 研究主題

絆を深め、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造

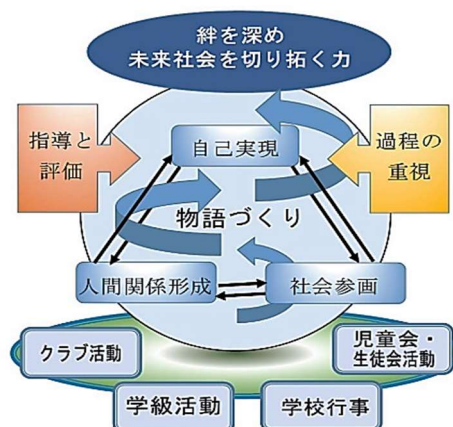
—「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の視点を踏まえた『物語づくり』の実践を通して—

II 研究主題のとらえ方

現在、コロナ禍における新しい生活様式の中で、まさに予測が困難な時代となっている。子どもたちを取り巻く環境も、今までと同じようには人とのつながりを築くことができなかつたり、通信機器の発達でネット依存の傾向が強くなつたりするなど、様々な問題を抱えている。その解決に向け、自分で情報を選択して適切に活用する力や、多様な価値観を認め合い人とつながる力が必要である。

特別活動は、様々な集団活動を通して、児童生徒が、社会で生きる基盤となる力を育む活動として機能してきた。また、協働性や互いを認め合う土壌をつくり、生活集団、学習集団として機能するための基盤となってきた。「なすことによって学ぶ」という実践的な活動は、集団への所属感、連帯感を育み、それが学級文化、学校文化への醸造へとつながり、学校の特色ある教育活動の展開を可能とし、それゆえに、感染症対策で様々な制限がなされても、人間関係の希薄化やコミュニケーション力の低下を招かないための創意工夫が今こそ求められる。

そこで、今後も「絆を深める」というテーマで、人との関わりをより重視し、心の育ちに着目した内面的な結びつきを大切にしながら、よりよい人間関係を築くための研究を進める。「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえて、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組む中で、集団の中で個が成長し、その成長が結びつきながら集団の成長へとつながる。この成長過程の足跡こそが自分たちの物語である。特別活動における、子どもたちの手による『物語』をつくる中で培う「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせることが、社会の一員として、自ら未来社会を切り拓く力を育み、自分らしい生き方へとつながっていく。



III 研究のねらい

- 1 「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の視点を踏まえて、児童生徒の絆が深まるような授業実践やその振り返り方法について実践的に研究する。
- 2 「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の在り方を、各教科や特別の教科道徳、総合的な学習の時間等との関連を図りながら研究し特色ある活動の創造に努める。

IV 研究の視点

1 よりよい人間関係を築く資質・能力の育成

～魅力ある学級の物語づくり～

一人一人が活かされる学級活動を展開し、それに伴い集団も成長する学級文化を育む。

- 温かい学級集団の中で、よりよい生活を築く実践のための話し合い活動の充実
- よりよい人間関係を形成し、自己の成長を目指す意思決定の在り方
- キャリア形成と自己実現を図る一人一人の意思決定の在り方

2 よりよい学校生活・ボランティア活動などの社会参画する資質・能力の育成

～自発的・自治的な児童会・生徒会活動の物語づくり～

学級や学年を超えた児童生徒相互の連帯感を深める自発的、自治的な活動を効果的に展開する。

- 児童生徒が主体的に創りあげ、よさを認め合える異年齢集団活動の充実
- 児童生徒が主体的に組織づくりを行い、課題解決のために合意形成を目指す実践の在り方

3 よりよいつながりを楽しむ資質・能力の育成

～協働し、認め合うクラブ活動の物語づくり（小学校）～

異年齢集団での活動を通して個性の伸長を図り文化を実体験できる活動を工夫する。

- 地域の特色を生かし、地域の人や文化とつながるクラブ活動の設定
- 異年齢集団で共通の興味・関心をより深く追求するクラブ活動の指導と評価の工夫

4 よりよい校風を確立しようとする資質・能力の育成

～集団への所属感、連帯感を深める学校行事の物語づくり～

創造的でダイナミックな体験ができる場や時間を保障し、所属感や連帯感を培う。

- 児童生徒の主体的参加で、特色ある学校やよりよい校風づくりにつながる学校行事の工夫
- 多様な他者との交流や豊かな体験活動を通して感動を生み出す行事の工夫

V 評価

- 1 特別活動の目標を分析し、育成しようとする資質や能力と評価の関係を明確にし、評価の観点各学校において独自に設定し、指導と評価に生かす。 【評価の観点】
- 2 各内容の目標を踏まえ、学校の実態や発達の段階等に即して、評価規準を明確にし、児童生徒一人一人のよさや成長を加点評価する。その際、集団の質の高まりについても評価し、その後の活動に生かす。 【個と集団の評価】
- 3 活動の過程を重視し、自己評価、相互評価、教師の観察、児童生徒の記録等を活用し、継続的、多面的、総合的に児童生徒の変容を評価することで、活動意欲につなげる。 【評価の方法】

VI 留意事項

- 全体計画と各活動・学校行事の年間指導計画の作成に当たっては、学校の創意工夫を生かし、学級、学校づくりを念頭に置きながら、学校の実態や児童生徒の発達の段階等を考慮して自発的、自治的な活動が助長されるようにする。また、各教科等の特性を踏まえ、適切な関連を図るとともに家庭や地域の人々との連携を工夫する。また、それらの計画は、必ず評価を伴うものとする。
- 特別活動と道德教育は、子どもの心を育てる二つの大きな原動力であり、両者の関連付けを研究しながら、子どもの変容を評価につなげる。特別活動での学級や学校生活における集団活動や体験活動は、日常生活における道徳的実践の場となる。特に、自己の生き方について考えを深め、集団のために働き、その一員としての責任や役割を担うなどの社会参画の力を育てるためには、特別の教科道德の授業との関連が重要となり、両者の特質を十分理解し、道徳性の育成へとつなげる。
- 児童生徒一人一人が社会的・職業的自立のために必要な能力を育成するため、自らの生き方を考えることができるよう、発達段階に応じ、小中連携を図った組織的・系統的なキャリア教育を推進する。その際、「キャリア・パスポート」を活用するなど工夫しながら、希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成し、社会参画意識を醸成する活動等の研究を進める。



指導講話

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官

安部 恭子 先生

【これからの特別活動の展望と実践

～コロナ禍だからこそ求められる特別活動の豊かな実践～】

「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会における審議のまとめ」

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う臨時休業からの学校再開後には、限られた時間の中で学校における学習活動を重点化する必要が生じた。そのような中で大事にされてきたのは、学級づくりの取組や、学校行事の工夫など、学校教育が児童生徒同士の学び合いの中で行われる特質をもつことを踏まえた教育活動を進めていくことであった。感染症対策を講じながら最大限子どもたちの健やかな学びを保障できるよう特例的な対応が取られた。我が国における学校の特徴的な特別活動の子どもたちの円滑な学校への復帰や、全人格的な発達・成長につながる側面が注目された。「協働的な学び」において、人間同士のリアルな関係づくりのためには、教師と子どもや子ども同士の関わり合い、違いを認め協力し合える関係づくりが大切で「協働的な学び」の効果を高めるためには、学級経営を充実し子どもが違いを認めて協力し合える学級づくりを進めることが必要とされた。例えば、学級活動(ホームルーム活動)で行われる合意形成の活動は、他の教科等での学習の質の向上にも有効であり、学級経営を充実し有効である。相手の思いを受け止めること、友達の意見を共感的に聞くこと、自分の思いをきちんと自分の言葉で伝えること、少数意見を大事にしながらかめていくことなど、互いを大切にしていれば学び合うことが特別活動の基盤となり大切になる。「運動会ができなかったので、子どもたちが学年運動会を計画し協力して実施した。」「学校のキーワードを掲示していつでも振り返ることができるようにした。」子どもたちだけでなく、保護者や地域に知らせることが学校への信頼感になる。キャラクターを募集した時も出来栄でなく、「応募してくれてありがとう。いいものに決まったよ。」という姿勢を大事にする。生活の中の問題点を子どもたちが話し合い、決めたことを実践し、それを生かすことで学級への愛着をもつというような活動を大切にしてほしい。これまでと同じようにはできない、今までに経験したことがない状況だからこそ、創意工夫し自分たちで自分たちの生活をよりよくすることが求められる。

【中央教育審議会 令和の日本型学校教育の構築を目指して】

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要である。

「個別最適な学び」「指導の個別化」「学習の個性化」を目指し、教師には個別最適な学びが進められるよう、これまで以上に子どものつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲などを踏まえその成長をきめ細かく指導・支援することや、子どもが自らの学習状況を把握し、主体的に学習を調整することができるように促していくことが求められる。

【特別活動における ICT の活用】

特別活動は「なすことによって学ぶ」という直接的な体験活動を重視している。その際、ICT 機器は便利だが、あくまでも道具であることを忘れないでほしい。臨時休業中のタブレットを使った学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報などを利活用するは、教師の負担を軽減することができる。ただ、動画を使って活動させるときに子どもたちに自由勝手に使用させることで、いじめにつながらないよう教師が適切な指導をする人権感覚を大切にしたい。また、遠隔地や他校との交流ができるのもメリットになる。単なる配信でなく、双方向で交流することが大切であり、「話す」ではなく「話し合う」、「学ぶ」ではなく「学び合う」学習になるようにしたいものである。

【築きたい人間関係】

築きたい人間関係は、自分たちで自分たちの人間関係をよりよくしようとして築いていく。そのために、違いを認め共に生きていこうという思いを育てないといけない。創りたい社会、集団社会を自分たちでよりよくする参画意識、自分たちの身近である学級や学校に対して子どもたちがよりよくする経験やよかったという気持ちがなければ育つはずがない。なりたい自分、よりよい自分に向けて前向きに頑張る子どもを育てる。そのために自分と他者、集団や社会との関わりを通してその力を付けていく必要がある。

【主体的で対話的な深い学び】

「主体的で対話的な深い学び」は授業改善の視点であると学習指導要領にある。特別活動は自分事になってないといけない。主体的に発言したり、考えを広げたり対話のよさを知ることが大切である。また、基本的な学習活動をスパイラルに繰り返しながら力を付けていく。その際、教師は集団や社会の形成者としての見方、考え方をいつも気に留めておくことが大切である。目に見えないし数値に現れないが、繰り返し学習し積み上げていくことが大切で、特別活動がこの資質・能力を育てていくことができる。子どもたちは自分のよさを自覚していないことが多い。だからこそ、それを体感できる特別活動を要として行うことが必要である。

【キャリア教育】

自己肯定感や自己有用感などは、他者との関わりの中でしか育たず、キャリア教育を行うことで感じることができると考えられる。小・中・高の連携を図るために、学級活動(3)で学びをつなげていく。キャリア教育は、職場体験やインターンシップ、進路だけではなく、学ぶことの意味や学ぶことを通して自分の将来がどのように変化するのかということを理解し、学びに対する意欲を高めていく学習が大切である。学級活動を中心として、小学校ではリーダーシップやメンバーシップ、フォロワーシップの経験が必要である。うまくいかなかったけれど手伝ってもらって良かった経験などが、今後の子どもたちの成長に生きてくる。

【キャリア・パスポート】

地域によっては「キャリア・パスポートができませんでした。」「個人情報なので金庫にしまっています。」などということもあった。そうならないようにしてほしい。子どもが学習するのは教科の学びだけではない。学校生活を通して様々なことを学んでいくことが大切だ。その時々自分の行動の振り返りや気持ちなどを残し、それを教師が知ること、個人に深く関わることができ子ども一人一人が、生き生きと学校生活を送ることができるようにしてほしい。

今後、タブレットが1人1台端末として配布されるため、キャリア・パスポートの内容は全て1人1台端末の中に入れて送るといった形が想像される。しかし、この形では子どもたちが保

存をすることで満足をしてしまう可能性がある。キャリア・パスポートは個人で目標を立てて、振り返りを必ずしていくということが大切であり、しっかりと記録を基に話し合い、よりよい成長のために教師が活用していく必要がある。

また、キャリア・パスポートでは、ポートフォリオにしていくことが大切で、学級活動（3）で活用すると書かれている。自分で書くことで生活や活動を振り返ったり、思い起こしたりすることが大切である。教師が見ている子どもの姿だけではなく、書いたものを見ることで、見えていない姿や頑張りを理解し、次の指導に生かすようにしてほしい。スモールステップでいいので次に踏み出したり、励ましになったりするコメントを書いてほしい。記憶は消えていくので、記録を残すことで学年が上がったり、学校が変わったりしたときに、元気をもてるものにしてほしい。そのために基礎資料を残す必要があり、学期末や行事などの時に、しっかり記録を持って話し合い、意思決定をする。クリアファイルに残し、次につなげる活動を大切にしてほしい。中学校区として小学校と連携してキャリア・パスポートを改定していくことを考えていく必要がある。見通しと振り返り、自ら課題を自己調整し、教師がコメントを書く。教師のコメントひとつで子どもたちの受け取り方が変わる。家庭からのコメント欄を作るのも良い方法のひとつ。ただ、様々な家庭環境があるので配慮が必要で、コメントを残して、学力には出ない子どものよさをキャリア・パスポートに残してほしい。

学級活動（3）は、なりたい自分に向けての生活改善や自己の課題解決など、自己のことを考えるようにする。何のためにキャリア・パスポートを活用するかの前に、どんな資質・能力を育みたいかが大切である。決して人との競争ではない。キャリア・パスポートで自分たちの成長や課題を共有することで、自他のよさに感動し頑張りに気付く。そしてなりたい自分について発表し調整する。

【カリキュラム・マネジメントの充実】

カリキュラム・マネジメントの三つの側面

- 1 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。
- 2 教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実践し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。
- 3 教科内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせる。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための臨時休業からの学校再開後にカリキュラム・マネジメントの重要性が改めて明らかとなった。カリキュラム・マネジメントを効果的に進めるために、学校として何を目標として教育活動の質の向上を図っているのかを明確にする。新型コロナウイルス感染症予防のため、今まで行っていた活動ができないという視点ではなく、どのようにすれば、感染症の広まっている中でも学ぶことができるのか考えることが大切である。

- ・教科横断的な視点で、目標達成に必要な教育活動や教育内容を効果的に配列する。
- ・体験活動を意図的、計画的に実施する。
- ・体験活動を核に、教科横断的に学年を超えて学びをつなぐ。

小学校における特別活動の実践が、基礎的・汎用的能力の育成につながっていることを踏まえ、「見通しをもって生活する」「社会参画意識の醸成」など、中学校以降のキャリア教育につながっていくものを整理し指導計画に生かす。

キャリア教育は「キャリア・パスポート」のような個別指導（カウンセリング）と学級会オリエンテーションや学校行事、各教科の授業などの全体指導（ガイダンス）の両輪が大切である。

「キャリア・パスポート」を活用した自己理解、児童・生徒理解をする。また、年間指導計画の適切な設定やキャリア・パスポートの効果的な活用が大切である。特別活動は年間 35 時間しかないなので、総合的な学習の時間や他教科でできることは行うなど、工夫して実践することが大切である。また、5年生から6年生へ学びをつなげたり、小学校の委員会の仕事から中学校の生徒会活動への参加につなげたりして系統を明確にすることなども必要である。そのために年間指導計画を適切に設定したり、キャリア・パスポートを効果的に活用したりするとよい。そして、子どもたちが体験や実践を通してなりたい自分になるために、目標を持ち計画を立て実践する。そこにキャリア・パスポートを使うのも一つの手段である。

キャリア教育において、資質・能力をどう捉えるか。特活は、各教科で身に付けた資質・能力を総合的・実践的に活用し、学びをつないで、各教科と将来につないでいくものである。それをキャリア教育における年間指導計画で各教科と特別活動を中心とし、何かの目標を教室に掲示し、いつも見えるようにするのもよい。愛媛県特別活動委員会は「物語」で研究を進めている。子どもたちに自分たちの成長を感じさせようとしている。このような取組が大切である。みんなが同じ形である必要がない。型にはめるのではなく、自分たちの学級に合った方法で行ってもいい。やりっぱなしにせず、振り返ることが大切である。子どもたちの思いをつなぎ、残していくことこそ大事にしたい。今こそ特別活動の充実が大切である。参画意識を大切にして自治的で、教師も共に関わり、異年齢と様々な活動を共有することが、キャリア形成につながる。昨年度と同じ活動はできないかもしれない。だからこそ、創意工夫できる子どもたちを育ててほしい。つながりを大切に、子どもと共によりよい生活や生き方を創ってほしい。



第一分科会「とっかつはじめのいっぽ」

児童生徒とより豊かな学校生活を過ごすために
—学級活動の指導法—

＜アドバイザー＞

愛媛大学教育学部教授 白松 賢 先生

【学級経営の充実について】

学級は対人関係を基本にしているの、他人は自分の思い通りにはならないことを前提にする。他人が自分の思う通りに動いてほしいとするならば、こちらからよい提案をして、先生が言っていることを受け入れたいと思わせることが大切になる。特別活動を使って学級経営の充実を図りたいときは、与えられた組織に入れば、そこにいる人の好き嫌いは関係なく、課題を一緒に達成する人間関係をつくることが重要である。特別活動が目指している人間関係はこれが基盤になる。人間関係が崩れていくときに、よりよくしようと思つて働きかけると、かえってマイナスになることの方が多く、大事なのは、人間関係は仲良くなった後の方が危険ということである。人間関係に距離があるときはお互いに礼節をもって対応するが、仲良くなってしまふと言葉が荒れたり、相手側も絶対に分かってくれるだろうと、相手に対する甘えも出てきたりする。昔は支持的風土という言葉が使われたが、その言葉をさらに発展させて心理的安全性という言葉がある。これは、自己と他者を同時に尊重する関係である。意見やアイデアについては否定されたり、批判されたりするということがある。しかし、自分の言ったことが批判されたとしても、この人たちは私のことが嫌いだからそう言っているわけではないと思えるような信頼関係が大切となる。

【自己肯定感について】

自己肯定感は、適切な位置にあることが大事で、高すぎたり低すぎたりするのは問題である。メタ認知能力が高まれば自己肯定感が適切な位置に調整されていく。自分を一番認めて欲しい人が自分を認めてくれたときに自己肯定感は高くなる。それが小学校低学年だと学級の中では先生であり、小学校4

年生から中学生では同級生や恋人になってくる。だから、先生は認めるのではなく同級生たちがお互いを認め合っていくような環境に結び付けていくことが、自己肯定感を育む上でとても重要となる。

【叱り方について】

常に弱い側の立場に立つというのが特別活動の基本姿勢である。みんなドッジボールをするときに、嫌だな、辛いなあと思っている子がいないかと想定しておく。弱い立場の子どもたちの意見も大切にするということを常に働き掛けることが大事である。言動と行動はいくら叱ってもいい。ただし、人間性の否定は絶対にいけない。行為と言動を制止するために叱る。はっきりすっきりバツサリ叱る。未来に向けてしか人間は行動を変えられないのだから。

【指示について】

どのような働き掛けをすれば、子どもが聞いて理解しやすいかと考える。子どもの個別最適化された学びを達成していくためには、合理的な配慮を工夫していく必要がある。椅子の座り方がきちんとしていない低学年の学級で「両足の裏を、足を揃えてぴったりと床につけて座りましょう」と担任の先生が言うだけでみんなすつと姿勢がよくなった。「ちゃんとしなさい」と言うよりは、指導する側もすごく楽だろう。

【学級活動とは】

学級活動とは、

- (1) 児童生徒と学級や学校生活をどうするか一緒に考える時間
- (2) 学校や家庭での生活をよりよくする時間
- (3) 学業や進路、将来について考える時間

学級活動(1)は、みんなで話し合う「議題」、学級活動の(2)と(3)は「題材」であるということを明確に区別して使う。学級経営の充実学級活動(1)を使いましょう、と今回の学習指導要領に明確に書かれたのは、先生が学級経営を全部担っているわけではない。学級経営ができて一人前という時代は1980

年代には終わっている。今はどんなに素晴らしい先生がしても、学級経営は不安を抱えながら行うものである。学級経営の成功は、一年間の子どもの成長を願って教壇に立てたら、それが成功だと考える。若手の先生の学級は荒れることもある。ベテランの先生みたいに子どもを抑え込むということは苦手だとしても、子どもの思いをしっかりと汲み取ろうとすることに一生懸命になれば、それでよいのではないか。

【話し合い活動について】

話し合い活動には3つのポイントがある。それは、①何のために、②何をするか、③どのようにするかである。45分間ですべて行うとなると、時間的に難しい。その場合、何のためにこの話し合いをするかを先生が決めてもいい。どこに落ち着きそうかなと事前に考えておくことが大事で、大切にしたいのは「自治」である。③どのようにするかが自治である。「きまり」を作って、「守る」活動がおすすめだ。学校行事に関連させて、自分たちで作ったきまりだから大切にしよう、と指導することが大切である。

【学級活動(2)、(3)について】

学級活動(2)、(3)は、題材・教材の資料がしっかり出来ているかどうかが大変だ。みんなで考え方や方法を話し合える集団思考があるかどうか。その上で、友達や同級生の考えている生き方や方法などから自分が使えるものを見つけていく。重要なのは、いつもできていることや頑張ってもできないことは目標にしないということ。例えば、宿題をいつも忘れてくる子が宿題を頑張るという目標を立ててもそれは難しい。そうではなく、宿題を頑張るとするのは具体的にどういうことかをコーチングすることが必ず必要。例えば、国語の漢字の書き取りだけはやっていこうとか、宿題が全部できなかったとしても家に帰って15分間は机に向かうとかから始める。

学級活動(3)はロングの目標を設定して行う。子どもたちの自己肯定感を高めたいとするならば結果と能力をほめるのではなく、「プロセス」を評価し、

ねざらい、意欲化することが大切。目標を決めて取り組むというプロセスにアクセスすることが大切。「目標の立て方がとてもよく出来ているね」「難易度が高い目標に挑戦していたね」と声をかけることにより、成果が高まりやすくなる。

学級活動(3)を生徒指導に活用することもできる。まず、一年後どのような人になりたいかという大きな目標を決めさせる。次に、その人になるために3学期までどんなことができるようになりたいかというリストを作らせて、その中から上記の目標を達成するための一学期あるいは月の小さい目標を決めさせて取り組ませていくと生徒指導でも活用しやすい。できていないことを叱って指導するのではなく、自分の目標を思い出して行動を改善するので、生徒指導が非常に柔らかくなる。子どもたちが作った目標や取り組もうとしている内容を把握し、それを思い出そうに働きかけるだけで叱らずに行動を改善に促すことができるので、特別活動をうまく利用していくとよい。学級活動(3)でなりたいた自分を決めさせ、学級活動の(1)と(2)を充実させていくことで、学校生活を豊かにしつつ生徒指導を充実させていくことができる。

【学級活動の危険な例】

学級活動の危険な例は、運動会で見つけた同級生のよさを発表しようといったワンショットプログラム。ある子には評価が集中するけれど、ある子には全然ないといったことが起こりやすい。もしこれをするのであれば、しっかりと一定期間全員のよさや可能性をみんなが見えるように工夫と手立てをすることが大事だ。年間カリキュラムにあるからするのではなく、どのような支援をしていくと、活動が充実するかを考えてやっていかないといけない。ワンショットでやるとかえってマイナスになることもある。

第二分科会小学校 学級活動(1)

つながり合い、よりよい学校生活を主体的に創造する児童の育成

～学年特活の実践を通して～

今治市立常盤小学校
教諭 竹内 律子

提案要旨

1 はじめに

本校は、児童数約500人の中規模校である。「豊かな感性を持ち、主体的に活動する児童の育成」を学校教育目標に、日々の教育活動に取り組んでいる。コロナ禍で、行事が次々と中止・縮小され、「できない」ことはたくさんある。しかし、そのような状況だからこそ、児童が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していく力を育成したいと考えた。そして、どうすれば今よりよくなるかを考え、友達と協働して学校生活を創る経験を積み重ねさせたいと思い、この主題を設定した。

2 実践事例

(1) Yes!!心密、No!!三密プロジェクト(6月)

新型コロナウイルス感染症の流行によりクラスの友達と触れ合う機会が減少した。こんなときだからこそ心を通じ合わせたい、できることを考えたいと本プロジェクトを立ち上げ、学級会において学年全員でできることを話し合った。本番は、各クラスの実行委員が他のクラスに出向き、自分たちのクラスで考えた遊びやゲームを行う「出前方式」により実施した。どのクラスも密にならないように工夫していた。活動後、感想を記入し模造紙にまとめることで、児童が感じたことを他の児童に共有することができた。

(2) 遠足実行委員会(11月)

例年実施していたバス見学遠足が中止となり、代わりに海辺へ遠足に行った。何もない海辺でできることを児童自らが考え、学年全員で楽しく遊んだ。

(3) クリスマスイベント(12月)

クラスだけでつながるのはもったいない、学年でもつながりたいと提案があり、本イベントを企画・実行した。振り返りの中で「絆を深めることができた。」という意見が出るなど、学年の仲を深めることができた。

(4) 新年のめあてを決めよう(1月)

なりたい自分を明確にして目標を決めてほしいとの思いから、学年特活として考える時間を設定した。活動の始めに担任がこれからの1年でどうなりたいかを発表したことで、児童もめあて作りのコツが理解で

き、例年よりも具体的な目標が作られていた。

(5) 学年末プロジェクト(3月)

学校の柱となる6年生になるためにどのように行動するべきか考える時間を設定した。まず、自分の学級の現状(よいところ、もっとよくなるところ)を把握してから本プロジェクトで実行する内容を3点考えた。

3

① 挨拶隊

全校に対して朝の挨拶運動を行った。チームごとに言葉を決め、「今日も1日頑張りますよ。」などの声掛けを挨拶に付け加えた。

② 6年生を送る会

例年より時間を短縮して行ったが、5年生を中心に6年生に感謝の気持ちを伝えるために一生懸命取り組んでいた。

③ スポーツ大会

学年の仲がより深まるように実施した。振り返りでは「今のようにみんなで協力し合える6年生になりたい。」という感想が児童から挙げられた。

3 成果と課題

様々なプロジェクトを学年で行った結果、学年のつながりが深まり、1つのチームとして動くことができるようになった。また、Q-U検査では、学年当初と比較して学校生活満足群が増加するなどの成果が見られた。

一方で、学期が進むとともに発案・活動が教師主導から児童主導へうまく移行するように、児童に主体的に活動できる力を付けることや教師と児童が一年の見通しをもつ時間を共有することの必要性を感じた。また、イベントのような楽しい活動への企画力は育ちつつあるが、学級や学校をよりよくしていこうとするための課題への気付きが弱いと感じるため、子どもたちから、クラスの課題について話し合いたいという声が出てくるような仕掛けが必要である。加えて、年間35時間の中で、どう学年特活の時間を組み入れるかについても考えていかなくてはならない。

研究協議

- 年間35時間の中で特別活動を推進する方法として、朝の会や昼休みなどの空き時間や給食の時間を有効活用することが考えられる。
- 学年特活では学年の先生の共通理解が必要になってくるので、しっかりと連携する。
- 子どもたちの提案が実現される過程を通して、自己肯定感を高めることで、より充実した特別活動になる。
- コロナ禍で大変だが、工夫してできることを考えていかないといけない。

よりよい人間関係や学校生活を目指した 話し合い活動の充実

～互いの良さを生かした異学年交流の取組
を通して～

久万高原町立美川中学校
教諭 春藤 康宏

3

提案要旨

1 はじめに

本校は、生徒数24名の小規模校である。自然に囲まれた久万高原町で過ごしている生徒たちは、地域の人にも愛され、部活動にも学習にも一生懸命取り組んでいる。しかし、小規模校ゆえに、人間関係の固定化が進み、自分の気持ちを伝えることを苦手としている生徒が多い。また、多様な意見に触れる機会が少なく、自分たちの視野を広げる機会が少ないことが課題として挙げられる。そこで、異学年との話し合い活動の充実やコミュニケーションスキルの向上を通して、人間関係形成能力の向上を目指したいと考え、この主題を設定した。

2 実践事例

(1) 話し合い活動の実践例

ア 聴こう・話そうハートタイムの設定
週に一度、朝の時間に全校での伝え合いの時間を設けた。コロナ禍における家での過ごし方や総体の感想、学校行事に向けての思いなど、自分の意見や考えを伝え合い、交流を図った。

イ ソーシャルスキルトレーニング
話す、聴く of スキルトレーニングの時間を設け、教師による実生活の場面を表したロールプレイを見て、自分だったらどうするのかを考えさせた。考えたことを友達と話したり、聴いたりすることを通して、人間関係を築いたり、人と上手に関わったりするためのスキルを向上させることができた。

ウ リズムダンスふれあいコンクールへの参加

リズムダンスふれあいコンクールへの参加を通して、異学年とのさらなる交流を図った。創作パートを全校で練り合った。発表して、話し合い、振り返り、実践するという流れを繰り返し、話し合いを重ねるごとに意見などが具体的になってきた。また、活動を通して自他の取り組みの良さに気づき、達成感や自信につながってい

る様子うかがえた。

エ 縦割り班での話し合い

縦割り班ごとにゲームを企画して全校で交流を図ったり、自主学習ノートを全校で共有してより良い学習につなげたりするなど、縦割り班での話し合いの場を多く設けた。運動会に向けてのブロック活動では、各学年に役割を与え、自分たちで作り上げる意識をもたせることで、より活動が活発になるようにした。また、遠足での行先なども話し合うなど、学年を超えて話し合う場を多くした。

オ 寮生活会

月に一度、寮でのイベントを企画したり、寮での生活についての話し合いをしたりする場を設けた。自分たちの生活をよりよくするという目的をはっきりとさせた話し合いをすることで、学年を超えて、よりよい話し合いをすることができた。

3 成果と課題

- 学年を超えて話し合いをすることで、多様な意見を生かしたよりよい合意形成を図ることができるようになった。また、学校としての一体感が生まれ、相手を尊重したり、互いのよさを認め合ったりすることの大切さを感じ、人間関係形成能力の向上につながった。
- 地域の人口も減り、生徒数も減る中で、活動の実施が困難になることが今後予想される。他校とのつながりを深めるなど、工夫が必要である。

研究協議

- 学校行事の時だけでなく、普段の生活から異学年と交流することで、全校で動こうとする意識をもつことができ、生徒が主体的に活動することができる。また、異学年の話し合いの中でも相手の意見を尊重したり、意見の中によさを見つけたりする活動は、生徒の自信にもつながるので、非常に効果的である。
- 生徒の減少により活動が制限される状況を打開するためには、他校とのつながりが不可欠である。近隣の小中学校と一緒に話し合い活動を定期的に行ってみるのもよいのではないかと。互いに刺激し合い、地域とのつながりを作っていくのもよい。

第三分科会小学校 学級活動(2)(3)

将来に希望や目標をもって生活する児童の育成

～2年生生活科との関連を通して～

東温市立北吉井小学校
教諭 倉田 淳

提案要旨

1 はじめに

前任校岡田小学校は「力いっぱい」の校訓のもと、勉強に運動にと意欲的に参加する児童が多く、地域も協力的である。また、目指す児童像をキャラクター「夢のクローバー隊」（通称夢クロ）とし、「目指せ夢クロ」を合言葉に学校生活の充実を目指している。

本学級の児童は、素直で活発な児童が多く、低学年期ならではの、初めての人や物に対しても物怖じせず関わろうとする様子も見られる。今の前向きな気持ちを大切にしつつ、より自分たちの将来に目を向けて頑張ろうとする力を育みたいと思い、本主題を設定した。

2 実践事例

(1) 自己有用感を高めるために

ア 常時活動の充実

(ア) お知らせボードの活用

自分の役割に自信を持てるようにした。

(イ) 振り返りタイムの充実

毎週金曜日を振り返りタイムにした。お願い・アドバイスカードも使用した。

イ 生活科「1年生をむかえよう」での取組

各教室の看板作りやなかよし遊びの計画などを行うことで、異学年とのつながりが生まれた。

(2) 地域にある人や物とのつながり中で生活していることへの気づきを高めるために

ア 生活科「もっとなかよしまちたんけん」での取組

地域への親しみや愛着をもつようになり、人々の思いや工夫にも目を向けることができた。

(3) 1年生の学びと成長を振り返り、次学年への目標と希望をもたせるために

ア 3学期授業参観日での取組

生活科「あしたへジャンプ」の学習を通して

子どもたち同士で大きくなった自

分のことを振り返ったり、家の人へのインタビューをして大きくなった自分のことを調べたりした。そして、参観日に、ありがとう発表会を開いた。イ 生活科「すてきな3年生になろう」での取組

「なりたい3年生に向けて頑張ることを決めよう」をめあてに、「探る、見付ける、決める」の学習展開を図った。

3

3 成果と課題

今回は主に生活科との関連を意識して学級活動(3)の視点を取り入れた実践を行った。今後は他学年でも、他教科との関連を図った実践が行えるように、全体計画の作成や見直しを行う必要がある。また、児童が自分の成長を可視化して振り返るためにも、教科ごとのポートフォリオに加えて、今後キャリア・パスポートも適宜活用して資料を蓄積させていく必要がある。

研究協議

- キャリア・パスポートをどのように工夫して改善したのか。
 - 全体を大きく変更するのではなく、実践した板書例のような内容に変えた。教科のキャリア・パスポートも出てきているので、少しずつ工夫していきたい。
- 今後は、どの教科と関連付けようと考えているか。
 - 年間指導計画の見直しを図っている。例えば、国語科なら興味を紹介したり、算数科なら互いの考えを伝え合ったりする活動などと関連付けられるのではないか。
- 自己有用感を題材に選んだ理由は何か。
 - 自分たちのしていることが、どのようにつながっていくのかを考える過程で、自信をもたせることが大事だと思った。
- 子どもたちへの働き掛けで意識した点、使うようにした言葉（物語）はあるか。
 - 「まずは、自分たちでやっごらん」とチャレンジさせた。活動の意味付けはしっかり行った。
- 生活科と学級活動(3)との関連性を意識して取り組んでいるのが素晴らしい。教師がキャリア教育を意識しているか、していないかで、生活科の学習も深みが変わる。
- 子どもたちが試行錯誤しながらよりよい方法やよりよい自分たちを見付けようとしている姿が伝わってきた。

主体的に自己実現を図る生徒の育成
～キャリア・パスポートの活用を通して～

内子町立内子中学校
教諭 池田 講平

3

提案要旨

1 はじめに

本校は、喜多郡内子町の歴史的な町並み保存地区に位置する、全校生徒193名の学校である。校訓「信頼」のもと、「自ら考え、行動する生徒の育成」を目指し、日々教育活動を行っている。

本実践では、2020年度から全面実施された「キャリア・パスポート」を効果的に活用し、主体的に自己実現を図る生徒を育成したいと考え、本主題を設定した。

2 実践事例

(1) キャリア・パスポートの活用

ア キャリア・パスポートとの出会い

最初に、小学校から高等学校まで持ち上がって使用するものであること、キャリア教育で目指す力について生徒に説明した。「今の自分に足りない力は何?」「進学した時、また社会に出た時、自分にどのような力を付けておきたい?」と問いかけながら、生徒とキャリア・パスポートを出合わせた。

イ ワークシートの工夫

自分の立てた目標を忘れる生徒が多かったため、教室背面掲示用のワークシートを作成した。これを教室に掲示することで、生徒が常に目標を見ることができるようになり、生徒が少しずつ意識できるようになった。

ウ 話し合い活動の充実

ペアやグループ、全体で話し合い活動を行っている。話し合いでの友人からのアドバイスをもとに、必要に応じて目標を新たに設定し直している。様々な意見を聞くことで、「目標を変えてみよう。」と言う生徒のつぶやく姿が見られた。

エ 教師との対話的な関わり

学期末の教育相談時に、一人一人とキャリア・パスポートを見返しながら、振り返りと次の学期への目標を生徒と共に確認した。

(ア) 生徒の変容

○ 男子生徒

「自分の理想に近付けていない。自信がもてない。失敗

が怖い。」と泣きながら訴えてきた。その後、1学期の振り返りの際、1年後の自分を想像する設問で「失敗を恐れない自分」との記述があった。生徒は体育祭の応援リーダーに立候補するなど、積極性が見られるようになった。

○ 女子生徒

1学期に「初めて会った人にも好感を持ってもらえる人になる」という目標を掲げ、「将来の夢が教師なので、いつも笑顔でみんなを安心させられるような素敵な笑顔でい続けたいと思った。」と理由を挙げている。2学期の目標を立てる際、他の目標は変えたが、「笑顔でいる」という目標は変えずに残した。自分と向き合いながら、キャリア・パスポートに取り組んでいるのが分かった。

3 成果と課題

○ 意欲的にキャリア・パスポートに取り組む生徒が増え、主体的に目標を設定し、目標実現に向けて、粘り強く努力することができている。また、自分の目標や夢を周りに発信できるようになってきており、認め合える集団に育ってきているように感じる。

○ 内容や方法については、試行錯誤しながら実践している段階である。小中高のつながりを意識していなければならないと感じている。連携をどのようにしていくかが課題である。今後も、少しずつ改良を重ねながら、生徒たちの自己実現に効果的な実践をしていきたい。

研究協議

○ キャリア形成には、小学校との連携はとも大切だと思う。

○ キャリア・パスポートが、夢につながるいいきっかけになっていると思う。小中高のつながりがあれば、子どもたちにとって、さらによりよいものになるように思う。

○ 小中の連携として、中学生が書いたものを小学生が見るなどしても、おもしろいのではないかと。職場体験などで中学生が感じたことを小学生に伝える機会があると、小学生にとってもよい学びになるのではないかと。キャリア・パスポートを学級担任が見て、それを有効活用できると、さらにおもしろいと思う。

**第四分科会 児童会・生徒会活動
・クラブ活動・学校行事**

よりよい人間関係を築こうとする自主的な態度の育成

～様々な人々との交流を通して～

八幡浜市立神山小学校
教諭 二宮 康誠

提案要旨

1 はじめに

本校は、児童数182名で、市内で2番目に児童数の多い小学校である。「知・徳・体の調和を図り、ふるさとを愛する心豊かな児童の育成」という学校教育目標の実現を目指して、日々の教育活動を行っている。

今回、異年齢集団での活動や児童中心の集会活動や他校の児童生徒との交流を通して、学年や学校の枠を越えて、心が通じ合うことのできる人間関係づくりを推進していきたいと考え、本主題を設定した。

2 実践事例

(1) 校内での取組

ア 全校遊び、なかよし班遊び

学期に1回程度全校遊びとなかよし班（縦割り班）遊びを設けている。児童会や6年生が中心となって企画・運営を行い、低学年も楽しめるようルールを工夫して活動している。

イ 各種集会等の活動

集会では、異年齢集団による活動を行っている。上学年の児童が下学年の児童に対して、笑顔で接しながら優しく声を掛けるなど、よりよい人間関係づくりの場となっている。

(2) ブロック（中学校区）内での取組

ア あいさつこだま運動

小中合同での活動である。児童生徒間の挨拶を充実させるとともに、地域へも挨拶を広げることが目的として取り組んでいる。

イ YBサミット

各校の児童会・生徒会役員が集まり、本ブロックの活動について話し合っている。ブロックの取組や情報交換を行い、リーダーとしての自覚を養う場となっている。

ウ 小中交流活動

小学校高学年と中学生との交流活動である。合同のグループを編成し、ワークやゲーム巡り、また部活動体験などを行っている。これらの活動を通して、小・中学生の人間関係づくりが広がっている。

エ 小小交流活動

同ブロックの小学生（3校）が本校に集まり交流する活動である。短時間での交流ではあるが、互いによりよい刺激となっている。

3 成果と課題

- 6年生が中心となり、低学年児童でも楽しめる活動内容や方法について計画を立てることができた。その結果、上学年の児童が下学年の児童に対して思いやりをもち、優しく声を掛けながら活動できた。
- 中学生や他校の児童など、様々な人と交流し、幅広く活動することで、よりよい人間関係が築かれた。
- 活動がマンネリ化することなく、児童が主体的に取り組めるよう、教師の声掛けや関わり方を工夫していく必要がある。
- 教師間や学校間の連携を大切にし、よりよいつながりを保ちながら活動していきたい。
- コロナ禍で、例年と同じような活動ができない。感染対策を十分にを行い、工夫して活動していきたい。

研究協議

- ブロック間交流では、他にどんな取組を行っているのか。
→ 教師間の情報交換やブロックごとの発表を行っている。
- 小中連携を図る中での、苦労や工夫を教えてほしい。
→ 児童生徒の意見をどのように取り上げていくかが、工夫のしどころであると同時に苦労となっている。また、その都度行う準備や確認などが大変である。
- 教師側のサポートは、どのように行っているのか。
→ 低学年の喜びが自分たち（6年生）の喜びにつながるという気持ちを大切に、教師も児童と一緒に遊びのルールを考えている。
- 高学年の児童が、低学年の立場に立って、ルールを考えている姿勢に感心した。

第四分科会 児童会・生徒会活動 ・クラブ活動・学校行事

主体的に考え、意欲的に関わり合う ことのできる生徒会の育成

～コロナ禍において、絆を深める活
動を通して～

新居浜市立西中学校
教諭 藤田 舞

3

提案要旨

1 はじめに

本校は新居浜市西部に位置しており、全校生徒201名の中規模校である。「豊かな人間性とたくましい実践力をもった西中生の育成」を学校の教育目標とし、日々の教育活動に取り組んでいる。

昨年度の生徒会テーマは「HERO～一人ひとりが主役～」である。コロナ禍で行事等が中止・縮小になり、日常生活においても制限があり、人とのつながりや一人一人の生徒が長所を発揮できる場面が減っている。しかし、本校の生徒は、「コロナ禍の今だからこそできることをできる範囲で取り組もう」という前向きな姿勢で活動していた。コロナ禍においても、生徒が主体的に考え、一丸となって実践することを通して、活動に関わった一人一人が達成感を感じるとともに、互いの絆を深めることができた。主体的に考え、意欲的に関わり合うことのできる生徒会活動について紹介する。

2 実践事例

本校では、「新しい生活様式」への啓発、「運動会の在り方」についての協議、「緑のバトン運動」への参加、「西中差別をなくす会」の取組を行っている。この中でも「運動会の在り方」についての協議を中心に紹介する。

(1) 「新しい生活様式」への啓発

文化委員会が考案・作成したピクトグラムを玄関に掲示している。そうすることで、全校規模での危機意識向上を目指している。感染症対策への意識を高めた上で、運動会の取組へとつなげていった。

(2) 「運動会の在り方」についての協議

生徒の合意形成を基に計画・実行する充実した運動会を目指した。そのため、生徒会役員を中心に話し合いを重ねていった。大切にすることは、何でも言い合えたり、発言がどこかで生かされたりするような雰囲気を作ったことである。

話し合いでは、3年生の視点、下級生の視点、保護者の視点、時間の視点、密回避の視点など様々な視点か

ら運動会の在り方を見つめ、活発に話し合いを進めていった。「学級の全員でできる総力リレーを残そう。」

「応援合戦の練習時間をとり、全校の親睦を深めたい。」などの意見が出た。決まったことは、競技数を半分にする、開始時刻を30分早める、賞を両団に与えるということである。

運動会までの生徒の様子は、異学年での交流が深まっていたり、運動会ができることに喜びを感じていたりして、全力で準備や練習に取り組む姿が見られた。

運動会後の生徒の感想としては、「コロナ禍ではあったが、今までとは違った運動会が堪能できた。」「とにかく楽しくて、絆が深まった。」などが挙げられた。生徒会が主体となり、楽しさ、たくましさ、充実感、達成感を感じられる生徒が作り上げた最高の運動会になった。

3 成果と課題

生徒の意見を基にして進められた活動は、全校生徒が開催方法や内容に納得した上で取り組むことができおり、全校生徒の一体感があつた。また、様々な活動を通して全校生徒の集団意識が高まったとともに、校内・地域・県外の方との関わりもでき、人との絆を実感することができた。

課題としては、企画運営のほとんどを生徒自らが行うことができるよう指導の在り方を考えていきたい。また、生徒の負担にならない程度に、校内に限らず様々な外部の方との交流もできる新しい活動を検討していきたい。

研究協議

- 1、2年生のことや、保護者のことなどを考えて行動する3年生が素晴らしい。
- 生徒に委ねる勇気が素晴らしい。生徒が自発的に考え、行動している姿がよい。
- 生徒会を指導する中で気を付けていることはあるか。
→ 生徒にどうしたいかを問いかけて、生徒自身が自己決定できるようにする。
- 生徒の意見が間違った方向に流れていった場合にはどうするか。
→ 守ってほしい内容を生徒に伝えた上で話し合いを進めていく。
- 応援合戦の勝敗をなくすに当たっての苦労はあつたか。
→ 生徒から勝敗をなくしたいとの意見が出たことを受けて、教職員もそれを尊重していった。

特活イノベーション

1人1 台端末を生かした学級活動(3)

<第15回四国地区特別活動研究大会会場校 今治市立常盤小学校の取組>

第4学年 学級活動(3)指導案

1 日時 令和3年11月

2 題材 「ピカピカそうじ大作戦」 活動内容(3) イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解

3 事前の活動

児童の活動	指導上の留意点	◎目指す児童の姿 【観点】〈評価方法〉
これまでの掃除への取り組み方を振り返るアンケートに記入する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 掃除に対する意識と、取り組み方を振り返った上で、もっと良くなるために頑張ろうという意欲を持つことができるようにする。 ○ 個々の課題や願いを把握し、指導・支援の手立てにできるようにする。 	◎ 掃除の取り組み方を振り返ったり、もっと良くなるために頑張ろうという意欲を持ったりして、学習への見通しを持つようとしている。 【主体的態度】〈アンケート〉

ICTの活用①

Webアンケート機能を活用したアンケートの集計

4 本時の展開

(1) ねらい 日々の掃除を振り返る中で、自分たちの頑張りや課題に気づき、自分の掃除の取り組み方に対して気持ちと方法の面から話し合って意思決定し、実践していこうとする態度を育てる。

(2) 指導計画

	児童の活動	指導上の留意点	◎目指す児童の姿 【観点】〈評価方法〉
導入 つかむ	1 自分の掃除への取り組み方について、問題意識を高める。(7分) ○ アンケートの結果 ○ 活動の振り返り	○ 自分の掃除への取り組み方について振り返り、できていることや、もっと良くてできる部分について気付かせる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 目指す4年生に近づくために、そうじをレベルアップさせる方法を考えよう。 </div>			
展開 さぐる 見つける	2 掃除の目的(意義)を確かめる中で、自分なりの願いを持つ。(20分) ○ 掃除をすると、どのような良さがあるかを話し合う。 ○ 身近に学校のために掃除をしている6年生や他学年のメッセージを受け取ったり、掃除のプロの映像を見たりして、話し合う。 (個人→グループ→一斉) 3 掃除の取り組み方について話し合う。(8分)	○ 掃除の目的を話し合うことで環境を整えることの良さや、人の役に立てることなどに気付かせる。 ○ どのような気持ちで取り組んでいるか、身近なところで多くの人の努力や支えがあること、協力して活動することの良さにも目を向けて話し合わせる。 ○ 気持ちと方法の二つの側面から具体的な取組を考えさせ、話し合うことができるようにする。	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> ICTの活用② タブレットを使って、個人での動画視聴。 </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> ICTの活用③ アプリ(ロイロノート)を使った、グループでの話し合い。 </div>

終末決める	4 実践することを決め、伝え合う。(10分)	○ ここまでの話合いで出された意見などを生かして、自分に合っためあてをワークシートに記入するよう伝える。	◎ 話し合ったことを生かして、自分が実践することを意思決定している。 【思考・判断・表現】 〈観察・ワークシート〉
-------	------------------------	--	---

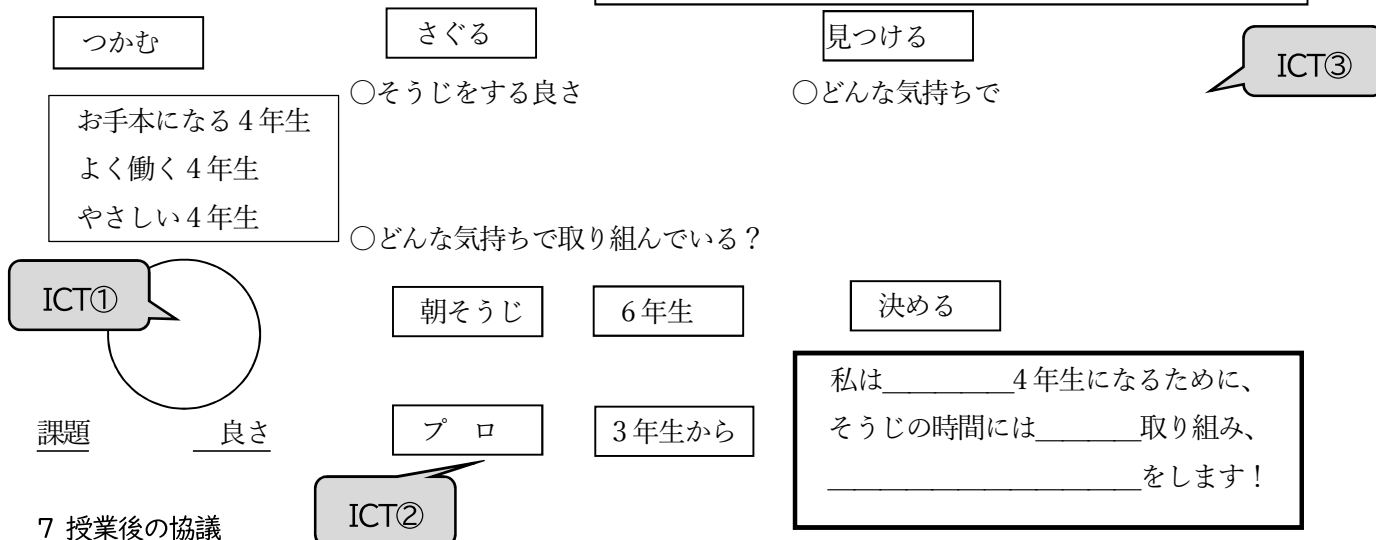
5 事後の指導

児童の活動	指導上の留意点	◎目指す児童の姿 【観点】〈評価方法〉
○ 自分の立てためあてや実践方法について振り返る。 ○ 友達同士で実践を確認し合う。	○ 帰りの会で自分の掃除について振り返らせる。また、適切な見取りを行い、良いところを積極的に取り上げ褒めていく。	◎ 意思決定したことを実践している。 【思考・判断・表現】 〈観察〉

6 板書の構想

11/○「そうじピカピカ大作戦」めあて

目指す4年生に近づくために、そうじをレベルアップさせる方法を考えよう



7 授業後の協議

【展開について】

- なりたい自分から入ったのは、とても効果的だった。キャリア教育は、働く意義、他者との関わり、コミュニケーション等を混ぜ合わせながら行われていくものだと思う。
- 資料を3つ提示(ボランティア・5,6年生・3年生)したことで、全校的な視野をもたせることができた。児童は、個人で考えるときも、少人数での話合いにも意欲的に取り組んでいた。
- 振り返りシートに、気持ちを書く欄があり、自分の感想だけでなく、それぞれの立場でどういう気持ちで取り組んでいるかを書くことができていた児童が見られた。

【ICT(一人1台端末)の活用について】

- 児童の話合いへの意欲の高まりにつながっていた。
- ロイロノートはどこで使うか、効果的なのは黒板とどちらがいいのかを見極めることが大切になってくる。
- シンキングツール、例えばくらげチャートを使う方法もある。
- 映像は事前に観させておくこともできた。4人班でそれぞれを分担し、ジグソー法も使えた。まとめ方の工夫をすることが大切だ。

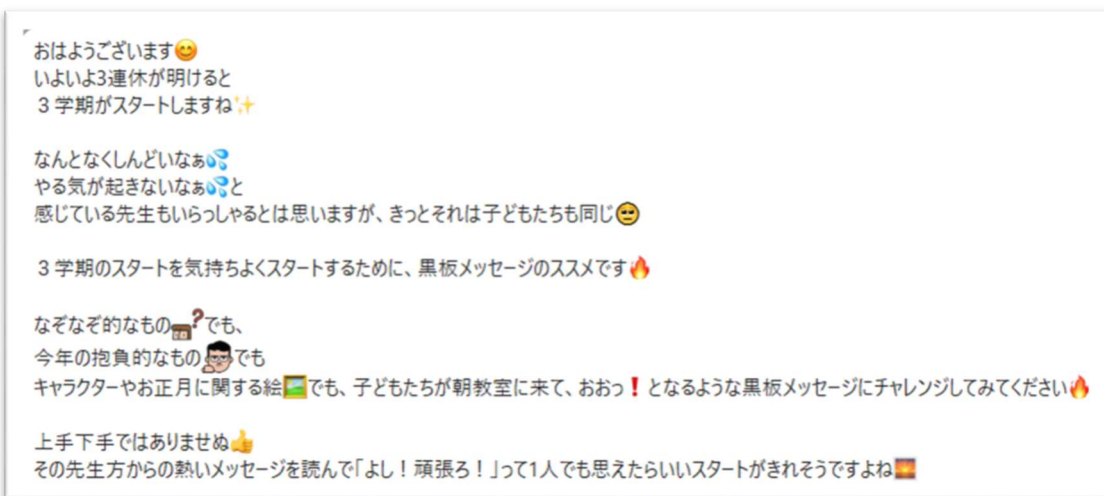
特活チャレンジシート

特活掲示板「結」より

特別活動委員会では、学級活動や学校行事・集会等、学級経営についての情報交換の場として、LINE のオープンチャットを活用して「特活掲示板『結』」を運営しています。盛り上がった話題から、一部を紹介します。

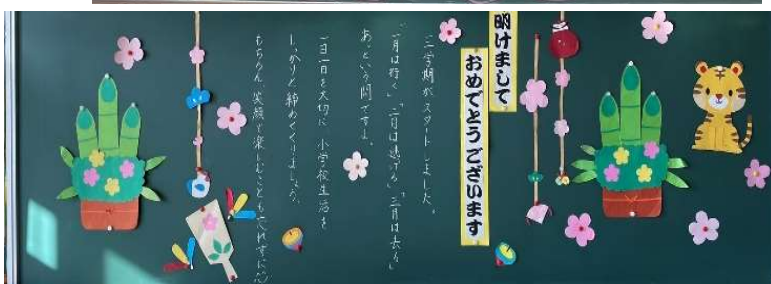
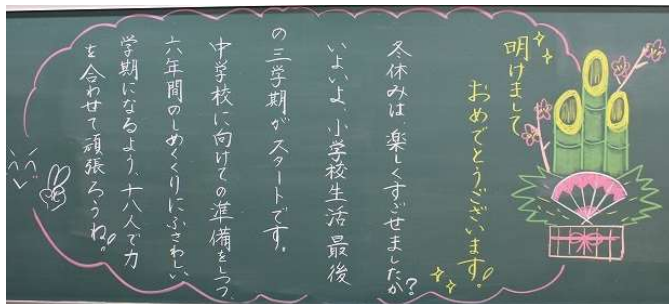
【学期はじめ】

学級経営では、学期が始まる日はとても大切です。その日を迎えるための準備について、情報交換しました。



新学期が始まる日。久しぶりの登校にわくわくする子、生活リズムが少しくずれてしまって疲れ気味の子、不安を感じていても勇気を振り絞って教室に来てくれた子など様々な思いをもち、教室に入ってきます。そんな子どもたちを迎える黒板のメッセージは、大切な学級経営の一つの手立てです。子どもたちを温かく包み込み、新学期での希望や元気を共有できるよう、みなさん工夫されています。

<投稿された画像> どれも素敵なメッセージです。参考になります。



【係活動】

係活動が活発に行われていると、学級がより楽しくなります。自治能力を育むためにも効果的です。しかし、「学期の初めごろは盛り上がるけれど、後半はマンネリ化してしまう。」などの悩みも多いものです。

○係活動大改編

係活動はクラスを楽しくするためのものです。当番活動ではないので、ぜひ次学期には楽しそうな係を提案してみましょう！

みんなで、係活動はどんな係だったか共有すると、次学期に生きるかもしれませんね。

- ・IPPON 係:写真などのお題からみんなが楽しい回答をする。
- ・イントロ係:音楽をかけてイントロクイズをする。
- ・特技係:みんなの特技を紹介したり、実際にしたりする係
- ・ギネス係:さまざまなギネス記録に挑戦する係

子どもたちからは経験していないことは出てこないなので、先生から提案してみるといいと思います。

カードゲーム係がおもしろかったです。カードゲームを自分たちで作って、それをもとに学級でトーナメント線を行いました。休み時間に盛り上がっていました。

生き物係は、学級を飛び越えて全校規模のイベントを、学期に一度やっていました。係の子が、学芸員となって飼っている生き物などの説明をしていました。

自分たちで必要感をもち、新たな係が生まれるのがよいと思いますが、児童がマンネリを感じている場合、幅広い選択肢から自分たちなりの活動内容を考えるきっかけとして、実態に応じて「こんな係もあるよ。」と紹介してもよいと思います。

学期の初めに、子どもたちがタブレットを使って、全国の学校の係活動を調べる時間を設けて、興味がある係を新設することを行っている学級もありました。学期途中に行い、軌道修正するための方法としての活用もあるかもしれません。

係活動の悩みも多く、みなさん工夫して取り組まれていることがよく分かりました。特活掲示板「結」では、悩みや困りごとなどをみんなで出し合い、実践を紹介し合っていきたいと思っています。詳しくは、最後のページまたは愛教研ホームページにある特別活動委員会内に掲載しておりますので、興味のある方は登録をお願いします。

特別活動委員会からのお知らせ

1 今後の研究会について

第15回四国地区特別活動研究会愛媛大会

「つながりを生かして学び、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造」

- 日時 令和4年11月4日(金)
場所 今治市立常盤小学校
内容
- ・ 授業実践(集会・学級活動)、研究協議
 - ・ 各県の実践発表
 - ・ 安部恭子先生の特別講演
 - ・ 特別鼎談 登壇者 杉田 洋 先生



(國學院大學人間開発学部教授)

安部 恭子 先生

(文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)

白松 賢 先生

(愛媛大学教育学部教授)

2 特活掲示板「結」

特別活動に関する情報発信や、学級経営なども困っていることを共有し、愛媛の特活を盛り上げようと立ち上げた『特活掲示板「結」』です。80名を越える特活大好きな先生方に登録していただいています。費用は通信費だけです。校種や年齢を超えて、交流できればと思います。

LINE によるオープンチャット

登録無料

特活掲示板「結」

はじめました

自由登録・退会OK!
いつでも登録・退会OKです。
途中で登録しても今までのテーマ
見ることができます。

リアルタイムな情報
今必要な学級経営や特別活動に関する情
報がすぐに入ります。

いつでもどこでも
研修施設に向かなくても、携帯電話
一つでばっちり!

様々な人!
校種にとられない様々な人や学校の
実践を聞くことができます

登録は以下のとおり
右にあるQRコードを読み取ってください。
オープンチャット「特活掲示板」に入ります。
名前を 苗字@学校名にしてください。

愛媛特別活動委員会

編集後記

今年度、本格的に1人1台のタブレット端末の導入が開始され、その効果的な活用について、日々頭を悩まし、模索した1年でした。子どもたち一人一人の考えを共有したり発表したりする場面において、容易に可視化できること、遠く離れていても共に学べることなど、便利だなと実感する場面が多くありました。同時に、やはり子どもたちの深い学びを支える土台として大切にしたいものは、「友達の思いを知りたい」「友達といっしょに考えたい」「分かってくれてうれしい」「みんながいるから頑張れる」といった温かい集団の空気から育まれる気持ちであるということも再認識した1年でした。どんなに時代が変わっても、私たちが大切にしていきたいものは変わらない。特別活動の「不易」な部分を、もう一度原点に戻り、目の前の子もたちといっしょに考え、実践し続けていきたいなと思います。